



石門

心學道札話

初篇

中

9
3895
2



門 9
號 3895
卷 2

早稲田 大學 圖書館
昭和 27.6.16 受
藏 書

夫亦付て友より何なるものあり本亦何なるものあり

長古と道より世より何房もぬいりのあきど是ハ余程

こんがくれ長古よ今日ハ以先程採此以命日ゆへ遊付

以奇採ダ以出ト也程不内佛へ流靈供儀へて是ト也

あしぬそちハ急いて日本橋へ付て胡蘿蔔と半房と

山の萃と推草と蓮招とけ又おと買て来て是れと

百文錢と又ツ後しまし主ハ長古ハあいつひるが

鹿掻かきげ衣の又百文ともし持て肉とかけちし日本

橋とさしてとつととをるお向うと道兩の衣垂がゆり

心學道話 卷二

今て。あま長去ちやうさくらくあつてハあつていさるが何とてしよ何とて
 けりと同たれハ日本橋にほんばしへ買物申かひものまをといつて来る。それ何と
 買又ゆくりと同とハ何を買かひ小うおきハ知しねといふげな
 大なるなを人の用もちずハ志こころまて只大病おほいとまきさぐりて
 ぢんと何やうな事トやあへる。志こころうしらの長去が
 わつて小笑こゝろひまきちやねけし席せきを小ハひきりまはすへが
 志こころへ回舎まわるといふ世去よと回トるでねむる意用いようとらて
 長ひる人ひとがぬいどのどや。そのらせ修しゆ必ひつ乃のハはうう知して
 あり。中ちゆうお試しやうに注しゆふふと回まてあううししませりハ去い清せい
 さんさん凡ふんけ世男せなんへ生なままを来るりのハ皆天みなてんの命令めいれいとて

生うまれて来るといふゆとやが。まづ何の半馬はんばハ世よ之の何と
 ぬぬ中ちゆう生なままをそのでひきりて回まてハ去い清せいが。そりや知れ
 といふ事ことを何と買かひて人乃力ひとのかちを助たすけよ中ちゆうれとりのトやと
 いふ語ことばハ何とぬぬ中ちゆう生なままをそののくと回まて。そりや財さいと若わかお
 中ちゆうれれのトやししらふ。女おんなハ何とぬぬ中ちゆう生なままをそののう。そりや
 門かどとちりね猫ねこハ何とぬぬ中ちゆう生なままをそのりや嵐あらしとぬぬ中ちゆう生なままを其その本もとハ何
 とししふ。そりや梅うめとぬぬ中ちゆう生なままをそのの杖つゑ乃の本もとハ何とぬぬ中ちゆう生なままをそのりや
 持もちとけりしに板いた又またけ茶碗ちawanハ。そりや湯ゆ茶ちやとらとよけ
 ぬぬ中ちゆう生なままを。そりや風かぜと出でしに世見よけん卷まきハ。そりや書物しよぶつとのせ
 小こといつて何とぬぬ中ちゆう生なままを。そりや物ものおのりのりハ。そりや物ものおのりのりハ。そりや物ものおのりのりハ。

と仕度しどこのトヤ云付いひつけとあて買かひてあさうく包かくハ長なが
 右みぎハさうらうしとくしや何なにも買かひてハ本もとをせぬらふ
 くらで事こと主しゆハ後あととまて後あとしと儲たかいごよしとくしとバ
 使つかハしる買かひ付つけはきひましとら。心こころをてハ中ちゆうくはうやせ
 ぬしつるも事こともかきさんも。あされとくしと使つかハまあ
 何なにと森もりとといひ所ところのトヤ又また白文はくぶんの織オリるを中ちゆうする
 買かひ合あひせよと後あとしハせぬそよ於おぬ半はん芽めの又またあて買かひをよ
 なる後あとしこのトヤ。それふその肝用かんようのあハ買かひ合あひん
 中ちゆうのまが買かひ合あひふしるきあて。そのうくよまご儲たかう是こ
 めとい。さうやどよしと大おほ病びやう冷ひやうくしと事ことと叩たたてしり

きーはれバ河かをしつよものハ仕度しどがあい彼かの長なが去きハあを
 色いろと形かたちくさう於おぬや半はん芽めがの用ようの買かひ合あひるさうらふ。
 そんなうらうらうと今いま日ひを換かへて付つけて買かひ合あひる。あ
 時ときが丁てい度どしハ序しよで買かひ合あひるさうらうとといふさげなが何なに
 まあまののさ河かをもあるりのトヤ何なに程ほど度どい世よ界かい
 てもをぬるものとは耐たもまうて是こゝりのハ何なにさうらふ。
 つの極ごく限げんハ二につ二につも天あま窓まどにっつて。あかりむさうら
 介けはぬハあつれしとさうらもけ指さなまさしとまて只ただが
 くしあさうらうトヤつとぬらうや何なにのたしと吐は
 トヤぞ不ふ買かひとえとへ何なにに自みづかし者ものと今日けふのおあさも

又ゆつよもくも。やらむうけ長去の仲るよやあ
 か。しう成小色つてえんやあぬゆてつるま
 えつふふ王乃痛つつふも人痛くけ又仲るよやあ
 梅なつだを生付て豊い入百文の積ごらよやあ
 ましつ湖法ふ入暇らつて用ふ見耳ふは笑ふ
 噴は、噴いぬふは笑ゆの入りつ痛と豊くあらよ
 入事らつてこれ我れ智法此入つてのき理とせよ
 こも早見入痛らつて親小孝の主人の忠義は
 中しく見事晴まらく他人の受ふお互ふ信実
 といて笑ふのい入此は牛着が笑ふとい中しや。

史小その抄心又典又教の意用い志を果て。つづめ
 ても言ても何かなしい角がけし。何をも海ぬの色か
 是ぬのつよ冥陰むらりに月日と費すい何と生若
 ていわるもい。その娘ふららにけまを事と物トや
 あいどくそのとがらるつらぐこれ恭奉此
 御代おしき徳く乃家業と大切お勤めさすなりやあ
 何不足のあいめでつらう道と知ぬし。そのあり
 かとさく養ふも思ひげ。あまが不足ぬの色が海ぬのて
 一幸三百又十余日。後の中乃大軍ふんと勿作るい
 トやあひり和衛清も宝子の田人れふも心む耐ハ

りらくの病やまいをまらむる時ときに六根ろくこん乃すなはちけんぞく思
 ひくふ不ふんぞやいをくしごとてその大おほい孫そんとくしと
 しく軍いんやぶまを成なり因いんやすかきさるものりう三子
 界かいのふと毎まいし知るくふもけまひと知しされば
 人ひとふゆべとつめてあるが成なり本ほん心しんといふ大おほい
 ごとく中ちゆうの押おし込こてきておまかくの鬼おにがわてあめ
 中ちゆうと切きてあると親おや子こ兄弟あにいもうと乃すなはち中ちゆうも他人たにん夫婦ふうふ乃すなはち中ちゆうも
 仇あか敵かた妹いの越おち度どと福ふくとい妹い妹いといとどとと柄て
 一ひと至いた人ひとのあまいと妻せむをいあまに主人しゆじんの遠とほと福ふく
 ありおひりこれこれが識しの法はふに被おほ辱ちゆう辱ちゆうその責せき合あひ乃すなはち合あひ

るよ、教しよとあるめて時ときをがよの悪あくいの世よるが度ひろい乃
 校せうい此こゝ世よが来きよやの娘むすめとやの何なにと割わり出だしと集あ
 用もち中ちゆうとんといりてぬはとくともうり是こゝが彼かの長ちやう長ちやうか
 おりよさんさんの孫そん乃すなはち中ちゆううごとくむいかう。うまごは
 清きよ精せい也や鴨かひるんをが喰くまぬといよと何なにとて煮ゆ皆みな
 大おほま一ひとお貸か乃すなはち孫そん信しん候こうといふの魚いへ修しゆふ天てん乃すなはち孫そん
 かく妻つま的てきいひ付つけてを落おちを救きうる中ちゆう成なりあが首くび
 たりとらぬり巻まきといふて極ごく楽らく修しゆ長ちやう乃すなはち性しやう介けいのふ
 びりうやあしぬ難なん後ごなものをとや善ぜん相しやう違ち背はいせり
 きてお害あやませんともいつめてある。とふぞ中ちゆう心しん知ちておれ

心學述言 卷中

かく乃冥喰とや天及様か作付くまゝの敵の及の
 大意用親小孝の主人に忠義より夫婦兄弟の
 も皆和合の事なり。いふ所のては、
 夫らしうも、女中の方の中におい、
 心学此親小孝の主人に忠義より、
 今の何言い、
 くそよでも、
 あるが、
 といといふ人も、
 よい中う、

仕居るし。はつと今天道徳の操り、
 しいやうと、
 な憂目に、
 して。くも、
 され。これ、
 その外法宗の、
 おも、
 まゝ、
 人、
 神佛への、

心學道言の巻中 二十

心學道言の巻中 二十

心學道之話初篇

後席

藝陽 奥田壽太講話
東武 平野橘翁聞書

有朋自遠方來不亦樂乎人不知而不愠不亦君子乎

有朋自遠方來不亦樂乎人不知而不愠不亦君子乎

して居てハ中く及よる事ハ出衆の孔子採さくも昔
 嘗終日言を以て終寝を以て思ふ蓋し其言不如此
 られしとて終くこれ者ハ吾朋友と考てよるは或は別
 する事つとて終ハ成ぬる事ハ其れ也然しては方々
 幸ゆふりると自然とそんたひりて又よの如友が考
 集る事ハ何ト也同氣相求の同類相集るともいふて
 考のりの同く一也一考集るハ自然の及理牛ハ牛づき
 馬ハ馬づれと申すハ其れハ同土が集る馬ハ馬同土が
 集る鶴ハ鶴同土居ハ同土様もハむく無同土鶴ハ鶴同
 土が。より集て面白くも其れ舞たり然る事ハ人々も

てうと其の意を慕打乃不くハ意打り集り奇人の不ハ
 奇人が集り後好ハ後好の友業乃湯好ハ業ハ湯の友
 何てもおあト志の友が或るト不く考集つてその及乃
 りと考つて終く仕あふ其れ業も其るハるハ利休乃
 奇小
 世の中ハハ業ハ酒業一ツ飯やううに相は乃友
 何でも其の業の托ゆでさ。その意うトやりのまして
 是ハ後此人乃道と知つて時友が考考方うと其れ考つて
 来て互よその及乃廣大なるを考り何ハ志と相合の
 トやその業しかくて其る事トや。そこで及ハ明き力

く。そのひよもつらうの形つても合点乃悪い人らわく
 丈でも一向死にぬをのしやといふ。いふも合点乃ゆるぬ
 事トや。おもひいしやろふがむの眼と開てこもこえ
 来死るといふ。いどんとろふトや。それとちよとた
 つて以信しやせよ何で中ても同トるトや。がえんあふ
 一粒の粗米が何。その粗米いえ来まあ何うく出来と扱
 か。そのむと為てこもこえ田地くせと稲とらふ物
 お来このトや。その又稲い何うくせと扱うとらふ。そらや
 そのお田地へ蒔と殺うくせとこのトや。そのまこまのこ
 ねい何うくお来こ。そらやその米乃稲うくお来こら。

その又お乃稲い何うくせと。そらやその米乃殺か
 殺くむと扱てみく。扱が本中殺かむと扱て久遠
 初れはく。ありく。以安の安化をうて活かすの米
 菩薩様トやお来ぬもお来ぬもいふ。笑ふとく。米乃
 一粒。兼一粒も兼来す。その画扱と改めつづき天
 罰とのぐもる。いさぬぞ大なるトや。又そのく
 むし。八時きり。うつ。か。米の粒が今乃兼南所をど
 ろく。味の中も砂粒の中。不。何つ。そのあもまね昔に
 か。い。ね。漬。落。地。の。海。お。ん。と。き。い。物。ト。や。あ。い。う。又。あ。ま
 う。う。没。幾。万。く。幸。運。も。同。ト。る。ト。や。そ。と。を。け。世。界。小

白木の樽もろこやへておとて尺一尺寸二寸の物ゆや丈とれて
 しくくの反之合すけ拾ねると一をうえ合す。
 乃と接ふとさるあぐらしくも接ぬやらぬもさしく
 めてゆきうまんうと幸を小後せば幸をわくねね
 しく丈へ丈しく丈いませぬゆく大方結附くもゆきう
 ませふとツいわぐく幸を小後せば幸をわくねね
 接ふたきべくまりく丈ありくしくを接ぬやらぬもさしく
 くれと美赤な赤繩ふぬて韃く腐う付てゆきうまんう
 そともあもあれくく大切なゆきうまんうと幸を小後せば幸をわくねね
 ゆきうまんうと幸を小後せば幸をわくねね

了は先祖く持傳くすしく心宗乃名細でしく切る
 道具とやとすくゆくれが思ひまいハ何ぞも切らぬ乃
 乃色をきばきハどんと是ハ色をきばきハどんと是ハ色をきばき
 きいすしく丈いませぬゆく大方結附くもゆきう
 ゆきうまんうと幸を小後せば幸をわくねね
 乃と接ふとさるあぐらしくも接ぬやらぬもさしく
 めてゆきうまんうと幸を小後せば幸をわくねね
 しく丈へ丈しく丈いませぬゆく大方結附くもゆきう
 ませふとツいわぐく幸を小後せば幸をわくねね
 接ふたきべくまりく丈ありくしくを接ぬやらぬもさしく
 くれと美赤な赤繩ふぬて韃く腐う付てゆきうまんう
 そともあもあれくく大切なゆきうまんうと幸を小後せば幸をわくねね
 ゆきうまんうと幸を小後せば幸をわくねね

一々切らんししをいすしはまばつ鏡のきり切えも
 折るれみ色くらむきまは鏡も来しして今下り出れ
 何の蓋もまぬりのにありししとてかく折るもせば
 え乃鞘へかきかしては飛れ濁へ蓋しして。りう二三十
 年しもうりもまふが今日ころぐれはあやしく出し
 心はよいかけまはが。りんが正宗てもまはしすしは折る
 物小破しして何の役もまはる摺る本もあやしくみで
 つけろすまはと。つうとけな何しとあ何の層うこととや
 るい。いん。造部ふしきこと人であしぬるふとひらき
 大切な世界の宝と何でもうい物ふまてはなす。志し

ころやあやのたし一信でまふまはるるも何のまはが
 席の裏の扇や女中方もやらうけ親比の中うなこ
 してハハみくねうや所懸髪膚これと父母は支取て
 毀傷さうい孝之始也身と之道をゆい名を後世小揚
 以て父母を礼は孝之終也と互小夫妻のざりく
 是乃礼えすや何一ツ。ふ足るよ父母より生れての自由
 心は又常の乃理を具へしれはく。まはさる。自由
 自身のけ名細まふ正銘を祇乃結構な正宗と遠いハ
 ひんが。その名細と何よきや。形をぞ。折る。鏡中て何
 けし角がくし何とらも金のひし。やと子孫乃

